

芸術療法入門

専門教育科目／2単位／T授業

担当教員 安原 青児

■使用テキスト 安原青児著『福祉のための芸術療法の考えかた—絵画療法を中心に—』大学教育出版社

◆参考テキスト

講義概要・一般目標

本科目では、まず人間の美的感覚や表現行為の意味を探る。その上で現代人にとって諸芸術における表現活動の意味と役割を理解し、それがどのように福祉や教育また治療的な分野でどう用いられるか概観する。芸術療法には広範な種類や諸技法があるが、セラピストの現場活動にそれがどのように活用されるのか、またセラピストの役割や人間としての在り方についてもその基本を理解する。その意味で本科目は、芸術療法の入門コースとして位置づけられる。学習の中心となる絵画療法では、クライアントの絵画表現の基礎的理解や作品の読み取り、色彩・形態の意味も概略を理解する必要がある。

目に見えない美的感覚と宗教的ともいえる芸術的感動と治療を結びつけるため、環境をどのように演出するかについても学習する。人はそれぞれ違う個性や物質を持つが故にクライアントへのアプローチやセラピーの方法も変化する。またセラピストも個性を持った一人の人間である。つまり芸術療法には他者に対する理解・洞察が必要であると同時に、セラピストとしての自己理解（自己覚知）が必須である。人間観の土台として「ホリスティック」な世界観を提示し、最後に「芸術療法家とは誰か」の問いを考察する。受講生には福祉に繋がる芸術療法の在り方に、新たな視点を獲得してもらいたい。

到達目標

- 1)人間として誰もが持つ内的な美的感覚について理解する。
- 2)人が表現することの意味と諸芸術との関わりについて理解する。
- 3)19世紀以降の現代美術や近年の作業療法・心理療法との関連から、芸術療法の歴史と理論的背景について理解する。
- 4)絵画療法における基礎的理解として児童画の発達過程その読み取りを理解する。
- 5)芸術表現の中の色彩や形態の意味について概要を理解する。
- 6)目に見えない芸術の内的価値と環境設定について、スピリチュアルケアの視点から考察を深める。
- 7)セラピストに必要な自己理解と他者理解、持つべき人間観について理解する。
- 8)福祉現場で活用され得る芸術療法の可能性や今後の課題について考察を深める。

評価方法

科目単位認定試験により評価。

学習指導

*本講座では使用テキストの第1部理論編を中心に学習を進めるが、関連箇所として第2部の各章を参照項目として明示する。また本科目の関連科目である「芸術療法演習」においては、引き続き第2部実践編を中心として学習することになる。

第1部 理論編

第1章 芸術の捉え直し

この章のポイント

第1章を中心に学習を進めるが、ここでは一人一人の人間の持つ美的感覚や美意識の問題を取り上げ、芸術の生まれる背景、現代社会や現代人にとって必要な芸術の役割について考えることを目的とする。

第2章 療法としての芸術と表現（関連箇所：第5, 8章）

この章のポイント

人間が表現することの意味を問い、同時に真の治療とは何かについても考察していく。そこには人間の無意識や存在すべてにかかわるホリスティックな世界観が見えてくる。それらの学習過程を経て、芸術表現の必然性を見出すことができると考える。

第3章 発達のアプローチから見た児童画（関連箇所：第6, 9, 10章）

この章のポイント

ここではまず芸術療法の種類や技法にどのようなものがあるか確認し、歴史や理論的背景について学習する。それを踏まえて絵画療法における系統的な描画発達過程の基礎的理解を促す。

第4章 色彩・形態のシンボリズム（関連箇所：第7, 10, 14章）

この章のポイント

表現者(クライアント)の表す具体的な色彩・形態の意味について、セラピストが行う表現の読み取りと分析の視点から学んでいく。関連箇所における具体例も参考にしながら色彩・形態解釈の基礎を学習すること。

第5章 芸術療法に求められるスピリチュアルケアの側面（関連箇所：第11, 13章）

この章のポイント

人が感動するとはどのようなことか、内的な美的感覚と繋がる宗教的ともいえる癒しの治療的感覚について、WHO(世界保健機構)が定義するスピリチュアルケア(スピリチュアルペイン)について学習し、受講生各自の考察を促す。またそれが形而上的な理論に終始しないよう、具体的な環境設定についても学習する。

終章 芸術療法士(アートセラピスト)とは誰か（関連箇所：第14, テキスト全般）

この章のポイント

芸術療法入門コースにあたる基礎的理解の締めくくりとして、誰がセラピストとして相応しく芸術療法を行えるのかについて学習する。テキスト全体に通底するホリスティックな人間観・世界観に立脚しつつ、自己理解や他者理解また芸術療法士の資格の問題も取り上げながら、福祉現場で活用され得る芸術療法の可能性や今後の課題、新たな視点の獲得を学習の目途とする。